

別れそして感謝(上)

会員 中田ふみ子

いま長年夫と共に病魔と闘い、泣いたり笑ったりと何度も苦難を乗り越え、過ぎた人生を回想しています。

小康状態が続く時はほつとする日々もありましたが、私たち夫婦はいつも病氣と背中合わせの人生でした。

夫は二、三年前から最後の入院までは不調を訴えることが多くなり、その度にいつもかかり付けの先生に良く診察して頂きました。

今回も検査の結果いつもと余り変わりないからと言われ、投薬を変えて様子をみていたようでした。

しかし、不調が長く続くので、札幌の病院に行つて診ていただきましたが、病名は『突発性乾湿性肺炎』と同じでした。北見に帰り掛かり付けの病院で入院させて下さいとお願ひしたら「家で気楽に

寝起きしたら、病院のベッドより時には庭の散歩も出来るし空気は良いし」ということでした。

今思うと、もうその頃から余り長くない事を先生は察していたのでしょうか。

二人で不安の日が続く、また悪い事が次つぎと重なり、日ごとにトイレが近くなり、夜フトンに入つても寝つく時間が無い程、五、六回はトイレに通うのです。もしや膀胱も悪いのではと思ひ、二人で日赤病院泌尿器科へ行くと「中田さん、膀胱より心臓と呼吸器がひどい。これでは辛いよなア、僕の専門ではないから」と、すぐ呼吸器科へ紹介状を添えて回され、早速入院することにになりました。

改めて診察され、すぐ酸素吸入です。このとき酸素が四十のこと

です。

平成十三年九月二十八日、これが最後の入院になりました。担当医は「僕は前にも診察したことがあるね」これは奇遇だと思ひました。何年か前に診て頂いたことを思い出していました。

この入院は一応一ヶ月の診断でした。私は少し長くなつてもよくなつて帰れるなら……。家での一人は寂しいが退院できることを願つて家と病院を往復する毎日が続きました。

時には昼食をとりながら見舞つてくれた方々のことなど嬉しそうに話しかけていました。日数を重ねていると友人、知人の方々からお見舞いやお花、美味しい果物などいただき主人と共にありがたく嬉しく思ひました。

検査の後、先生から説明があり、これから

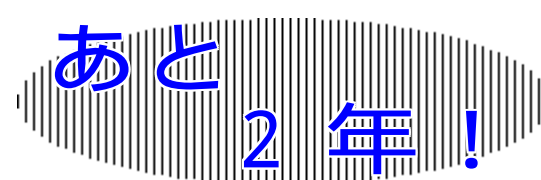
は酸素吸入を続けなければならぬこと、それには障害者手続きをしましょうと言われ、主人も私もショックでした。

市役所へ行き手続きを済ませ、二人で家に帰れることを願ひました。ひと月近く経つたころ夫は「さつぱりよくなるならぬ、このぶんならかえれないなア」とつぶやいていました。

それから間もなくのことです。主治医から最期の近いことを知らされました。

先生は「本人は相当辛いはずですよ」と病状を話してくださり、主人との別れが一步一歩近づいていることを知らされて、長い間薬を飲み続け苦しんだのだからと、自分に言い聞かせても、ただ泣くしかありませんでした。

(つづく)



代表 谷川勝男

もしギリシヤはアクロポリスの丘のバルテノン神殿が現代によみがえつたら人は、どんな感嘆をおぼえるだろうか。

そう、平成26年の開院にむけて動きだした新・北見赤十字病院が現在の地に完成した姿は、あのギリシヤの丘のバルテノンにでもなぞらえるしかない。

至高の医療機器としてガン撲滅をになう「ペット」だけでなく、病院全体が時代の最先端を行く施設として小公園を表玄関に完成したその姿を思いうかべる

とわくわくどきどきしてしまふ。

2011年11月11日、70回目の誕生日を迎えて「古希」への思いを深くしたわが命に思いをのこすことはいないが、思えば当時「不治」の病でもあつた結核に罹患して、北見赤十字病院の女医先生にアメリカ渡来の「パス」を処方されて命をなげらえることができたのが60年前、11歳のときだった。

いろいろな思い・考へがあつて、いろいろな営み・行為があつてしかし、新・北見赤十字病院は平成26年の開院にむけてその活動



をスタートさせたのである。

そして完成したその病院を目にした時、すべての市民、オホーツク圏の人々、道東一円の人々さえ、北見のここに、この病院ができて良かったと思つてくれるに違いない。そう信じて、新病院で仕事をされるすべての人たちと共に、大切な病院を育む心の準備をしながらその日を待ちたい。

編集後記

謹賀新年

日本中に甚大な被害を残して、平成23年は去りました。しかし、私たちは各地にそれらの困難を乗り越えた人たちの支えあう姿がまぶしく輝いていることを知りました。

新しい年は、私たちのオホーツク圏においても命や家族の大切さ、地域の絆など学んで行きたいと思ひます。(阿久津)